
妖精な妹は夜だけ魔王【2chなろうスレ企画】

ReiLei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精な妹は夜だけ魔王【2chなろうスレ企画】

【Nコード】

N3631U

【作者名】

ReiLei

【あらすじ】

可愛い妹様は魔王様でした。

実の兄妹と言う垣根に悩みながら火遊びに興じる妹と、それに付き合わされる兄。

周囲を巻き込みながら少しずつ二人の関係は変わっていく……かも？

え、義妹なんて言うセコイ、又ルイ逃げ方はしませんよ？

『妹の品質示すBMW』ってやつです（違う

頑張って寸止めをしよう！と言うネタです。

もう本番なければここでいいよね、みたいなあ……orz

気が向いたので更新再開。

割とベタな小悪魔キャラになりつつあるよーな。

プロローグ

彼、佐和山 洋介は何故か午前二時という中途半端な時間に目が覚めてた。

そして重い瞼を開けると、薄暗い部屋に人の姿を捉える。

僅か頭一つ分ほどしか離れていない位置に見える見慣れた顔。

シーリングライトの白熱電球の淡いオレンジ色の光が物の少ない室内と、そして彼の身体に覆い被さるような姿勢の少女を照らしている。

ふつくらとした顔立ちも、見開かれた大きな瞳も……そして薄衣越しにその細い身体のラインがはつきりと透けて見える。胸元のボタンはすでに外れており、大きく開いたネグリジェの隙間から程良く膨らんだ胸が覗いている。

少女の表情は気づいて貰えた事に対する喜びと、同時に戸惑い、そして潤んだ瞳はまるで誘惑するかのように奇妙な艶を感じさせる。それは彼女のベッドの下、床にまで達している長い黒髪も相まって、艶やかさをより一層引き立てているように見える。

よく見ると頬が紅く染まっている。

彼女は身を乗り出し、顔を耳元へ近づけると耳朶へ唇を付けると唇に含み、舌を這わせ何度も甘噛みする。暫く後に唇を離すと、赤い舌を耳の内側へ、外側へと忙しくなく移動しながら舐め上げていく。

そこから項から首筋、そして鎖骨へと順番に下を這わせる。

非現実的な状況に、彼は薄暗い自室のベッドの上で情けない事に、ただ目を丸くするしかない。

「……………え？」

彼は、この状況を寝ぼけ気味の頭では全く飲み込むことも、整理することも出来ない。

ただ『どうしてこうなった』と言う驚愕のみが脳内を駆け巡る。

そんな彼の気を知ってか知らずか、少女が瞼を閉じて動く。

洋介の唇は、柔らかな感触に包まれていた。

小鳥が啄むようなそんな口づけ。

その一瞬の印象は鮮明であつたが、何をされたかを理解するまでには暫くの時間が彼には必要であるように見える。

「ふう……ん、うう……」

彼女は緊張の糸が切れたのか、多様な感情と共に息を吐き出す。

そして胸元を隠していたネグリジェの最後のボタンを蓮し、全身の力が抜けたかのように臆することもなくその身体を洋介の上に横たえる。

その細い体の線がくつきりと透けて見えるほどの薄衣越し、それも下着すら付けていないからこそ感じられる彼女の身体の感触。皮膚を通して感じる女の子らしい柔らかさ。

それが、ようやく彼の意識を現実へと呼び戻していく。

心臓の鼓動が高鳴っていく。

身体を密着させ、より押し付けるようにして身体全体を……洋介の顔をはつきりと見られる位置まで、そう目と鼻の先になるように動かす。

「お兄様……私の、目をよく見てください……ね？」

「……？」

洋介はその言葉の意味が全く理解出来ていなかった。

彼女はそんな不思議な顔をしている彼の頬を両手で優しく包み込む。

ひんやりとしたその掌の冷たさが、蒸し暑いこの季節にあって心地良く感じられた。

その心地よさが彼の意識的な抵抗力を著しく低下させていく。

「……………な、なに？」

意識の中に何かが侵入してくるような不快なようで不快でない感覚。

それもすぐに消えて、喻えようのない全てを誰かに委ねてしまいたくなるような甘い倦怠感と、欲情が意識の奥底から沸き上がってくる……………そんな気分を感じていた。

抵抗する気力、体力が奪われて……………彼の意識は朦朧としていく。

それに対して神経が敏感になっているのか、全身から収集される情報が脳の処理限界を超えてオーバーフローし溢れ出ていつてしまふような感覚。過敏になった全身の感覚は、否応なしにその上に身を横たえる少女への認識を先鋭化させていく。

洋介は完全に支配下に置かれていた。

「お兄様は、私に全てを委ねてくださればいいのです……………わかりますか？」

「……………」

洋介はその言葉に余りにも自然にただ一度瞬きをして『Yes』と応えていた。

言葉を発することすら出来ない……………できたとしても、それすらも億劫な行動でしか無い。

この時点になって彼は少女の黒い瞳が真紅に染まっていることに気づく。

そしてこの時点に至ってようやく気づくのである。

しかし、すでに全てが遅い……全身から血の気が引いていくのを
知覚する。

原始的な恐怖、未知なるものへの恐れ。

「お兄様……ごめんなさい」

再び唇が塞がれる。

最初の啄むようなさやかな感触とはまるで違う……濃密な情報が五感からもたらされ、脳内を、意識の中を満たしていく。少女の強く唇が強く、時に緩急をつけて弱く、その変化に満ちた情報の洪水。

それを全て受け止められるほどの器の人間は恐らく存在しない。

彼も無意識のうちに、意識レベルでそれを拒否しようとも身体は彼女に応えていた。

少女の額から一滴の汗が流れ落ちる。

それまで冷たかった彼女の身体も暖かく火照り、密着した身体は熱を貯めこみ、二人とも全身がねつとりと汗で湿っている。

彼女の唇から甘い吐息が漏れる。

唇が離れていく。

「はふう……まだ足りません……」

「グッ……」

洋介は前頭部に軽い頭痛を感じる。

怒りに震える時のように、頭に血が昇っていく。

彼女は肩で息をしながら、洋介の腹の上をまたぐように起き上がる。

オレンジ色に染まっている純白のネグリジエは汗を吸い、ピッタリと彼女の肌に張り付いている様子が彼からはつきりと見ることができる。日本人らしい撫肩、程良く膨らんだ乳房も、細いウエストからヒップに至る流れるような体のラインも……その光景は扇情的に思える。

彼はその彼女の姿から視線を逸らすことが出来ずに居た。

「ちゃんと……見てくれますか……？」

洋介はコクリコクリと頷いて見せる。

偏頭痛はより一層ひどさを増してくる。

少女はそれを見ると安心したかのように微笑みを浮かべると、ゆったりとした動作で肩に手をかける。そしてネグリジエの端を摘むと一気に下まで勢い良くずり下げると、肌に張り付いた薄衣は皮が剥けるように、彼女の身体から剥がれ落ちて白い肌が顕になる。

腰の下辺りまである、長い黒髪が肌に張り付いている。

汗に濡れた素肌が電球の明かりを反射して輝く。

その光景を最後に彼の意識は途絶えた。

Scene 01 . とある朝の風景

佐和山 洋介は朝から表現しがたい不快感と倦怠感に襲われていた。

あまりの不快さに起きてからまず、体温計を取り出して口に咥えてしまったほどである。

しかし、幸か不幸かは判別が付かないが体温は平常であり、身体は恐らく健康そのものであるということが確認できただけである。

ベツトリと汗で湿ったシャツが肌にまとわりついて不快感が増す。二度寝したい誘惑を押さえ込みながらベッドを後にする。

窓を開け、新鮮な空気を取り込もうとするが、朝も早いというのにムワツと来る熱気に反射的に窓を閉めてしまう。一瞬だけ覗いた空は腹立たしいほどの快晴であったのだけは網膜にこべり付いている。

何故こうも一日の始まりから憂鬱な気分にならないといけないのか、などと愚痴るがそれをした所でどうにもならない。

理不尽さに腹を立てながら溜息をつく。

「だるい……」

小言を呟きながら、ドアを開けそしていつものように階段を下る。共働きの両親はすでに出かけているようで——そもそも昨日、帰宅していたかどうかすら定かではないが——家の中に人の気配は少なく、玄関にも靴は極々いつも通りに二足しか見当たらない。数日前に『デスマ』などと言うよくある言葉を吐き出しながら肩を落として出かけていく母、そして同じくシステムトラブルで帰宅できないと電話がかかってきた父……この家ではよくあることである。

今だからこそ高校生だから良いような物の、これが彼が小学校高学年の頃から続いているのだからなんと救いようがない。小学生

の子供二人を残して頻繁に両親ともに家を空けるというのは今思えば相当に問題があるように見える。

お陰さまで、彼には家事一通りをこなす生活力が付いたという面もあるので、それはそれで良かったのかも知れないなどとも思う事がある。

それは洋介のたった一人の妹も同じである。

リビングに足を踏み入れると、朝のニュース番組の音と共に、トントンという包丁を刻む規則正しい音が聞こえてくる。

「みや、おはよう」

いかにも日本の朝らしい、合せ味噌の味噌汁の香りが部屋には漂っている。

しかしそれは突如として途切れる。

「……………っ!？」

台所に立つ長い黒髪のみやと呼ばれた彼女は、包丁を握る腕を止めピクリと肩を震わせる。

白地に濃紺色の襟、真紅のタイを合わせたオーソドックスなセーラー服の上から、飾り気がなく極普通の純白のエプロンを羽織っている。今時の女子高生にしては大人しめの膝丈のプリーツスカートと、濃紺のハイソックスと言うどちらかと言うと真面目という印象の容姿。

両親の放任主義——最大限好意的解釈をするなら『ば』である——に見せかけた『放置』が余程良い方向に作用したのか、洋介の妹はぐれることもなく、染まることもなく珍しく真っ直ぐに育っていた。

よくできた妹だなどと彼はいつも思う。

彼女は何を動揺しているのか肩で息をしている。

「どうした？」

「……いえ、おはようございます。今日は……随分と早いですね？」

時間は七時過ぎであり、彼にとっては通常の生活リズムの範囲内に収まっており特別早いわけでもない。ギャルゲの主人公達のように目覚めが悪いわけでもなく、二度寝して遅刻するようなこともない。

模範的とは口が裂けても言えないが、一般的な進学校の生徒水準の生活を送っている。

彼は麦茶でも飲むついでに妹の横まで歩みを進める。

「体調悪いなら無理しないほうがいいぞ？」

そして、真横に立つと彼女の額に何気なしに掌を触れる。

特に熱っぽさもなく、むしろ低体温の彼女らしくヒンヤリとして
いるほどでこの暑い時期には心地良いほどである。

黒い瞳を宿す大きな目が、パツチリと見開かれ耳が真っ赤に染ま
っていく。

この暑い季節には心安らぐ、彼女の付ける香水、シトロンの爽や
かな香りが鼻孔を付く。

「だ、大丈夫ですから……はあ。そんな事より早く準備してしまっ
てください！」

彼女は洋介の手に握られたガラスのコップ——恐らく妹の趣味で
あり、底へ行くほど深い蒼色のグラデーションが無駄に美しい——
が、この細い腕のどこにそれだけの力があるのか疑問に思えるほど

の力で、力任せに奪い取られる。

そして彼は背中を押されて、無理やり周り右させられる。
背から小さなため息が聞こえた。

リビングには淡々と朝食を摂る音、そしてTVのニュース番組の音のみが流れている。

今日の食卓は奇妙に静かであった。

それは主に彼の妹の態度に原因があるように思える。

洋介から見て今日の彼女の態度は明らかにおかしく、どうみても拳動不審である。

何よりも洋介と全く目を合わせようとしない。

その理由が全くわからず、それが彼を無意味に混乱させてしまう。少なくともいきなり彼の料理にだけ毒物が仕込まれているだとか——洗剤を入れるなど——メタボアツクやらと言った嫌がらせはなく、料理の質はいつも通りに変化はない。

ただ、今でも顔を俯かせ、時折顔を上げて彼の顔色を伺うように見たかと思うと、ピクリと震えて再び顔を戻してしまう。そんな状況がこれまでの間、一分周期ほどで繰り返されている。

洋介は下手に蛇穴をつつくのも良くないと、敢えて何も言わず味噌汁を啜る。

そんな奇妙な状況でもこうしているのは、特にそう決まっているわけではないが、特別な用事でもない限りは2人は揃って食事を取ることに決めているからである。それは両親共に居ない日が決して珍しくなかった頃からの——今でもそれは大差ない——習慣であり、簡単に変わるようなものではない。

ほんの十分ほど前に連絡があったところによると、父親は急な出

張で明日からシンガポール行きらしくすでに成田空港にいるとのものであった。それも、割と良くあることであるので2人は、ただ『そう』と言って流してお終いである。

少々可哀想に聞こえるかも知れないが彼らにとってはいつもの反応である。

『次のニュースです……昨晚……』

洋介がふとTVに目を向けると、そこには中々に凄惨な破壊活動の現場の光景が映し出されているのが目に入る。

そう頻繁にある事ではないが、割とこの手の事件はよくある。

二十年ほど前から増えており、当初こそ秩序の崩壊だとか凶悪犯罪などと持て囃されたが今ではすっかり日常の光景の一つになっているね、とは両親の言である。人間とは慣れる生き物だとはよく言うがこれもその類であるらしい。

世界に目を移せば、日本における『それ』などは大したものではない。

「相変わらずだなあ……困ったもんだ」

「……………っ！」

「どうした？」

洋介からは俯いている彼女の表情を見ることは出来ない。

しかしそれまで箸は止まり、何を動揺しているのかカタカタと小刻みに震えているのがはつきりと見える。洋介は別にみやがやったわけじゃないだろう、と呟いているがそれが聞こえているようには見えない。

彼女はいきなり箸を置くと、テーブルに両手を付きながらドンという音と共に立ち上がる。

その意外な反応に、洋介も驚き箸が止まる。

「……なんでもありません!!」
「そ、そうだな……?」

それはなんでもないと自白しているようなものだろ、と言うツツコミは野暮であり、彼は喉元すら過ぎて口内にまで侵食したそれをなんとか再び押し戻すことに成功する。

そして彼女が席に着くとそれまでの光景が再開される。
変化といえば、彼女の溜め息が少々増えたことくらいである。

「本当に、だいじょうぶか?」
「……大丈夫です、よ? 別に何処かおかしい訳ではありませんから」

「まあ調子悪い時は休めよ?」
「はい……、はあ……」

相当に重症な様子である。

これ以上言った所で意味はないと判断し洋介は、それ以上の追求を止める事を決める。。

さすがに長年、妹が生まれてから一五年にも渡って一緒にいるのだから彼女の性格についてはそれなりによく理解している方だと彼は自負している。

ご飯の最後の一口を放り込む。

「ごちそうさま」
「お粗末様でした……」

それだけ言うと、食器を重ねて持つと席を立つ。

「……………」

「うん？」

すでに登校の準備がととのっている彼女と異なっ、彼はこれからである。

このままボーツとしていては遅刻するような自体になることは到底考えられないが、あまりギリギリになるのも彼は好まない。

しかし、何かを言いたげな彼女の視線がこの場を離れることを拒否させる。

そう、大きな瞳がまっすぐに見つめており、いかにも何かを言いたげな表情をしている。

少なくとも怒っているようにはまず見えない。

「うう……兄さんのバカ！」

「……は、い？」

「なんでもありません、さっさと準備してしまってくださいっ！」

洋介はコクリコクリとただ頷く。

佐和山 雅はらしくないと思いつながらも大きな溜息をついてしまふ。

それも無自覚なものであり、後から気づくのであるから彼女にとっては都合が宜しくない。

心なしか彼女が大切に伸ばし続けている黒髪の色艶もいつもに比べると、幾分か劣っているように感じられてしまふ。

それは気分的なモノなのであるが、実際的な問題として基礎化粧品ノリがあまりよくないように感じられる。同級生達の一部や、大人達がするように顔面にベタベタと塗るような事はさすがにする気はなかった。それでも『女』としては最低限の事はして置かなけ

ればいけない気がする……その辺りが彼女にとっては悩ましい。

考えれば考えるほど、さらに細かいことが気になってしまい思い悩み、更なる深みに嵌って行くという負の無限ループ状態。

「はぁ……これは、ううん……こうとか？」

彼女の今日の朝は随分と溜め息が多い。

風が吹けば乱れてしまう程度の無駄な行為だとわかっていても止められない止まらない。

そしてそんな無駄な行動をしている自分に呆れて、また溜息をつく。

溜息をつくたびに幸福が逃げていくのならもう数週間分はどこかへ飛んでいってしまってもおかしくない。

鏡に写るその自身の姿をじっと見つめる。

彼女は決して今の容姿が嫌いというわけではなく、むしろそれと言えば仏罰が当たってもおかしく無い程度には可愛らしいと自覚している。強いて言うならば、少々ふつくらとした丸顔とパツチリとした大きめの目のために童顔であり幼く見られがちな事が不満といえは不満である。

いかにも日本人と言った見た目と親がつけた名前もあって、それらしいキャラクターとして振舞うようにも心がけている。

逐一、他人様からイメージと違うなどと言われるのも面倒なのである。

「ああ、イヤだなあ……どんな顔をしてればいいのかわからないし」

朝食時の自身の過剰反応と、態度に嫌気が差してくる。

彼女にとって幸か不幸かは別としても、兄である洋介が深夜のことを全く覚えていない様子であるのは幸いでもあるし、同時になん

とも言えない虚しさが込み上げてくると言う意味では不幸でもあるのかも知れない。

加えて、自分でもどうしてあの行動に至ったのかがまるでわかっていない。

そもそもわかりたくもない類のものであった。

「もう穴があつたら入りたい気分って……こう言つのなんだね」

彼女は肩を落とすと、とりわけ大きな盛大に溜息をついてしまう。
このモヤモヤ感は暫く取れそうにはなかった。

Scene 02 . 広がる妄想

「九七回目、ちょっと溜め息多いぞ?」

学食の窓際の一席に向かい合うように腰掛けて昼食と決め込む女性徒が二人。

セミロングのダークブラウンの髪を弄びながら、マナー悪くフオークで長い黒髪の少女を指しながら、彼女はそう端的に指摘する。

彼女が今朝から数え始めて通算九七回目となる目に見える溜め息――小さなものを含めるのならば恐らく数倍にも達する――を力ウントしながら呆れ顔をしながらもニヤニヤと笑みを浮かべてもいる。それに対して、黒髪の少女こと佐和山 雅は浮かぬ顔をしている。

朝から溜め息が止まらないということは彼女自身も自覚しており、すでに何処へと羽ばたいて逃げていく幸福については既に考えないことに決めていた。仕方ないと諦め、それなりに平常に振舞おうと心がけていたとしても、それだけでは心の何処かに引っかかる小さな骨は取れそうにもない。

忘れてしまえば、気にしなればそれだけで済むことと言う類ではないのが救いようがない。

そう簡単に思い切ることが出来るほど単純なことであれば、普段の彼女ならば軽く水に流してオシマイである。しかし何処からともなく、どれだけしつかり心に蓋をしても染み出し、沸き上がってくる粘着質の感情はそれを良しとはさせない。

忘れることを許さない記憶、それが彼女にとっては忌々しかった。加えて、いつでも何処でも、時も場も選ばないのだから尚更である。

ただ、時間が経つに連れて少しずつ感情には整理は付きつつある。それを認められるかどうかは別問題であるが……

——それにしても茉奈も何をしてるんだか……そんな人の溜め息の回数なんて数えて何が楽しいのか理解出来ないわ……

雅はそう思考を無理やり切り替えると行儀の悪い彼女へと向き直る。

するとニヤニヤと噂が大好きな女の子らしい、楽しそうなネタを見つけたという気味の悪い笑を浮かべている顔が、彼女の視界に飛び込んでくる。

「茉奈もわざわざ数えている暇があるなら、真面目に授業受けたほうがいいですよ？」

「いやあ、授業よりもみやを観察してるほうが面白い」

「なんですか……それは………？」

相変わらず不真面目な小学校以来の付き合いという、遍歴の長い友人に溜息をつく。

それでいて、一応は地方とは言え県下三指に入る進学校に在籍するだけの学力はあるのだから彼女も決してバカではない。もつとも、彼女……茉奈が合格できたのは雅の努力の賜物であるという見方も多い。

この溜め息は九八回目である。

「九八回目……重症だねえ」

「私だってこういう日くらいはあります……」

雅はフンと顔を背けてしまう。

茉奈は不気味な笑みはそのままに学食の無駄に油っこく、濃い味付けのパスタを口へと運ぶ。

一家揃って薄味、さっぱりした味わい・食感好みの佐和山家では

ありえない程の……良く言えば濃厚な味付けに最初に一口食べた時などは彼女は思わず顔をシカメてしまった程である。

他のメニューも基本的に質より量であり、彼女たちの口には合わなかった。

それをスイスイと口へ運ぶ友人を、奇妙なものを見るかのような表情で雅は見つめている。

食文化の壁は分厚いらしい。

「月のモノでもないのに……ね、みや？」
「知りません」

雅はそう言うと、卵焼きを一つ箸でつまむ。

その様子をじっと見ている茉奈は珍しい友人の反応にそのニヤケ顔を加速させていく。

「みやらしくもなく、恋わずらいつて言うやつですか？」

その彼女の一言に胸がチクリと刺すように痛む。

雅はそもそもらしくないとはどういう意味ですか、などと内心で不満を漏らしながらも、同時に『ありえない』とその言葉を必死に否定しようと試みる。

何か……それこそ今手に握っている箸でも壁に投げつけたい衝動に駆られる。

しかし、それは背中に覆い被さるように存在している一匹の黒猫様によって見事に抑え込まれてしまっている。普段の彼女を覆い隠し、優等生で物静かで、賢く物分りもよく、それでも芯は強くて……そのように振舞うために必要な猫の皮、それが彼女にとっての见えない巨大な黒猫である。

黒猫様がニヤーと大きく鳴いたように彼女は感じた。

雅は、朝だと言うのに蒸し暑い空気の中でも必死に冷静さを保っていた。

満員電車の窮屈さを避けるため、と言う名目でここ数日は数本早い電車に乗り——あまり効果はないようであるが——登校している。好む人間は少ないだろうが、彼女もその例に漏れず満員電車というもの的心底嫌いであった。しかし、数区間、時間にして一〇分程度という短時間であっても通学するためにはそれに揺られなければならない。

それが彼女の気分を更に憂鬱なものとしていた。

密集した人の汗の匂いや、オヤジ連中のワキガの臭いなどが彼女の鼻を突く。

それに加えて、近くのOLと思しき女の、ナチュラルメイク系であるようで全くナチュラルではない——首の上下ではつきりと色が違うのがわかる——三十路近いすでに老化の兆しに見える肌を分厚く塗り固めた化粧品品の臭いに加えて人工的な香水のきつい臭い。

混ぜるな危険という類のものが混じったバイオハザード一步手前に思える最悪な環境。

冷房がかかっているとは言っても位置によつてはどれだけの効果があるか知れたものではない。

電車の三角コーナーを無理やり確保できたのが不幸中の幸いであった。

「最悪……」

「あのオヤジとかホント死ねばいいのにねえ……あのババアもただ」

英語の小テストに向けて単語帳を開きながら彼女は小声で呟く。
横のポールに陣取る茉奈もたいそう不愉快そうな様子で問題の才

ヤジとOLを睨みつける。

さすがに自覚があるのかその女子高生二人の冷たい視線に対して、申し訳なさそうな表情になるとその標的は視線を逸らしてしまう。それに対してツンと澄まして『キメてます』と言った彼女は気づきもしない。

雅は『ああはなりたくないですね……』等と呟きながら視線を単語帳へ戻す。

「全くだねえ……あのババア」
「……………はあ」

ほんの半年前ならば理解できなかった兄の感情が、この数ヶ月で色々と理解できるようになったように彼女は感じていた。

そう、『俺は化粧臭い女と香水臭い女は背後から蹴りたくなるし、両方？ そんなモノは線路にでも突き落としたくなるね』という兄の言葉の意味がよくわかるのである。歩く公害などというのは無自覚で周囲にばらまかれるものである。

そしてそれを誇って澄まし顔をしているのだから尚更に不愉快なのである。

世の中体験してみても判ることというのは非常に多い。

いつもならばすらすらと頭に中に自然に入っていく単語群が今日はどこかでつかえてボトルネックが生じているような状態になって、キューに溜まっている。次から次へと無理やり押し込もうと努力しても溜まるばかりで一向に減る様子はない。

それもまた彼女のイライラを加速させていく。

そのあまりの時間の無意味さにパターンと単語帳を閉じ、黒革の鞆の中へ押し込む。

「みや、もういいの？」

「うん、一応家でも勉強してますから？」

「相変わらずの優等生っぷりですね……お見事お見事」

そう不真面目な学生である茉奈はケラケラと笑いながら言う。

そんな彼女の様子を横目に見ながら雅はそつと瞼を閉じる……いつものように心を落ち着けて、背中の黒猫様を被り直すための彼女にとっては儀式のようなものである。心のなかで『黒猫様、黒猫様』と、またいつものように呟くが揺れが収まる気配はない。

振り落とされまいと必死に両肩にしがみついている黒猫様の重たい感触。

勿論気分的なものに過ぎないが、心の動きと連動したその重量感は身体に負担になっている。

——兄さんか……

兄である洋介の姿が思い浮かぶ。

滅多に家に姿を見せない——正確に言うならば、滅多に二人の前に姿を見せない——両親に比べてもっとも身近で付き合いの長い家族の顔。小学校高学年の頃から最低限の事だけを教えられたのみで事実上『放置』され、四苦八苦しながら家のことを一緒に捌いてきた関係。

今でこそ難なくこなしている家事も最初は必死になって実地で学んでいたことをふと思い出す。

世間一般的な兄妹の水準を基準に見れば近所でも仲が良いと評判の二人。

——私もどうかしてる……

始めての啄むようなキスの感覚が蘇ってくる。

自然と心臓の鼓動が早くなり、体中に熱い血液が巡っていくのが

はつきりとわかる。

そして自ら求めるようなより濃密な感覚の記憶……幾度も唇を濯ぎ、洗い、忘れようとしても忘れられない感触。

更に多様な記憶と感触がはつきりと奥底から沸き上がってくる。

兄の耳、首筋に浮かんだ汗の匂い、そして塩辛い味……それを求めた記憶。

滝のように溢れ、流れる汗を吸いベタつき、全身にまとわりついた薄衣の不愉快な感触……それとシャツ一枚を間に挟んだだけで全身で感じた彼女の兄の身体の肌触り。

そしてそれを脱ぎ去った時の恍惚としてしまうほどの開放感。

身体のをまるで堪能させるように押し付け、痴女のように迫った醜態。

——うう……

更に高鳴っていく胸の鼓動。

抗うことが出来ないような甘い感覚が身体にしみていくような感覚。

兄の大きな手が髪にそつと触れられ、手櫛で梳かれる感触。

額に、頬に、耳に、そして唇に指先が触れる感覚……それが最後に触れたのはいつだったかと思い起こそうとする。はつきりと思いつく事などできるわけもなく、ただ漠然と年単位で昔のことであるただけしかわからない。

そして頂から首筋へ、鎖骨へ……胸元へゆつくりとその手は全身を隈無く探るように、上から下へとゆつくりと降りながら彼女の身体をまさぐって行く。

その感触に身体がピクリと小さく震える。

——気持ちいい……？

雅はその自分の意識にゾツとする。

自身の身体に見ず知らずの誰かの手が触れることなど考えたことがないわけではないが、それは決して心地良さを感じさせるようなモノではなかった。不愉快だと言い切れる訳ではないが、それをすぐに受け入れられるとも思えなかったのである。

しかし、妄想の中の手は彼女の意味を無視するように更に下へとその場所を移す。

決して豊かとは胸をはって言うわけではないが——もちろん彼女自身は言うつもりも胸を張るつもりもない——平均程度には膨らんだ胸を包み込むように触れ、その敏感な先端を敢えて避けるように長い指が蠢く。

——うう……んう。

そのじれったさが彼女の神経をより研ぎ澄ましていく。

電車が何度目かのトンネルを抜けた事で生じる眩しさが、彼女の意識を現実へと揺り戻す。

——兄さんなんですよ……ダメ。

体温がゆっくりと確実に上がっていく。

首筋からツーと汗が一筋流れ、胸元へと滑り落ちていく。

「みや？」

茉奈の声が雅を妄想の世界から現実へと引き戻す。

蒸し暑い空気が再び肌にまとわりつく感触、鼻を突く臭いが彼女を不愉快にさせるのだと彼女は自分にそう言い聞かせる。自身の妄想を止められた事に対して不快感を感じているわけではないと思いきみたかった。

電車は長いトンネルへと潜っていく。

ドアガラスから見る外は光もなく暗く、彼女の姿をはっきりと映している。

彼女の瞳はいつになく覇気がなく、虚ろであった。

「？」

「なんかぼーっとして、どうしたよ？」

「疲れてるのかも……」

それは半分程度は本当であり、それと同程度には嘘であった。

沈黙が場を支配する。

しかしそれも決して不愉快ではなく、彼女にとってはむしろそれなりに心地よい。

電車がトンネルを抜けるとパツと景色が明るくなり、一面の緑が広がる。

次のトンネルを抜けると何もなければであるが、そこにはこの地域で最大規模であり、彼女らの高校のある街がその姿を表すはずである。

対向線走る編成とすれ違い、その衝撃で車両が僅かに揺れる。

「ほどほどにしなよ？」

「わかってます」

雅は柔らかに微笑むと短くそう言った。

彼女にとって幸か不幸かは判別がつかないが、恐らく幸運であったのは朝の様子を見る限りでは彼女の兄は覚えていないか、覚えていたとしても夢だと思っていると言う節があると感じられたことで

あつた。

しかし、今の彼女にはそれすらも忌々しいと感じられる。
自分だけが悶々とし悩んで過ごさなければならぬ状況が許せない
のである。

「……違います」

雅は不都合な間を、自らの手で開けてしまったことを後悔する。
そして九九回目となる溜息をつく、次で三桁の大台に乗る事にな
るが気にしても仕方がない。

「あらら、今の間は何なんでしょうかねえ……さあさあ、吐きなさ
い、吐くのです、吐き出すですよ!!」

「はぁ……」

彼女は記念のため息をつくが、それを喜ぶ気には到底なれるわけ
もない。

そんな張り合いのない彼女の様子を不安気に茉奈は見つめている。

「……………ねえ、ほんとうに大丈夫？」

滅多に見れないほどに不安を隠そうとしない茉奈の顔を正面から
見つめる。

そして、雅は更に続けて溜め息をついてしまう。

何を考えても、何をしても状況は一向に好転せず、むしろ順調に
悪化して負のスパイラルにいい感じに嵌り込んでいるような気すら
感じている。むしろそれが正解だろうと理解していても、それを抜
け出すような効果的な術は思いつかない。

彼女は、ここまで心配させてしまう自身の状況に呆れ果てるしか
ない。

「大丈夫ですよ……？」

雅は心ココにあらずといった表情で弱々しく応える。
梅雨とは思えない暑さが、彼女を一層に弱らせている。

Scene 03 . ままならない現実

彼、佐和山 洋介は窓際後方と言う絶好のポジションにある席で頭を抱えていた。

4階と高いこともあって、窓を開け放っていればそれなりに風が吹きこんでくこともあって、まだこの教室の中では快適な生活を営むことが出来る。

たかが地方の一公立高校だけあって、エアコンなどという気の利いた物はあるわけもない。

さらに悪いことに、所謂盆地型地形のこの街、しかも小高い丘の上にあるこの学校は夏は無駄に蒸し暑く、冬は寒いという学業には決して良い立地ではない。おまけに、後背にある山から野生動物や虫などが校内に出没するのも決して珍しいことではない。

1階の教室などは虫で苦勞することも多い。そして学年が上がって、階数が上がると今度は暑さで苦勞する。

先年導入された、天井に括りつけの扇風機などは気休め程度でしか無い。

それでも無いよりはマシである。

「はあ……」

彼は憂鬱そうに無駄に快晴で、雲一つない空をみあげている。

白地に朝顔と金魚をあしらった『夏らしい絵柄の扇子』と言う選択が、彼らしいようで彼らしくない。

それでパタパタと仰ぎながら溜息をつく。

水無月、六月、言わば梅雨の真っ只中だというのにこの天気である。

朝の天気予報によれば1日快晴であり最高気温は35度であった

と、彼は意識の中に刻みたくもないと言うのに勝手に刻み込まれていた。

まだ2限目が終わったばかりで11時過ぎであるが、教室前方、黒板の横にかけられた温度計は既に30度を大きく超えて35度に迫ろうという値を示している。

そんな聞きたくもない報告を告げてきた、隣席に座る腐れ縁の姿を見る。

彼女も同様にクリアファイルにプリントを何枚か挟んで強化したものを、団扇替わりにして必死に仰いでいる。

しかしあまり効率が良さそうには見えず、どちらかと言えば暑苦しいと彼は思う。

肩の辺りで切りそろえた黒髪、少々キツめの顔立ちに銀縁のメガネ、マンガやエロゲ・ギャルゲならばいかにも『委員長』と言った容姿の彼女。性格がキツメであるとかそう言うのが王道であるようであるが、さすがに残念ながらそこまでは当てはまらない。

そもそも彼女は委員長ですら無い。

そんな事を進んでする、もしくは任されてやるほど奇特な性格を彼女はしていない。

「洋介、どうしたの？」

そんな彼女、三輪 由利子の言葉に、洋介は露骨に嫌そうな顔をして応える。

それに対してニコリと、いわゆる暗黒微笑の類という表現が適切な冷笑を浮かべる彼女にも全く動じることなく彼は追い打ちをかける。

その日常でありなあらただならぬ気配を感じた周囲の肩がピクリと動く。

「お前さんのその姿が暑苦しい……邪魔だ、消えてくれ」
「そこは、お世辞でも可憐だとか、眩しいとかでしょう……邪険にされたものねえ」

彼女は溜め息をつきながら怒った風もなく淡々と言う。

洋介はその光景を脳内でシミュレートする……が、光速でアホらしくなり首を数回左右に振ると中断してしまう。

しかし、やらないと言うのもそれはそれで面白くないと彼は判断する。

「由利子はいつ見ても可憐過ぎて眩しいわ……って、言ってるきめえ」

露骨に酔っ払いが路肩に胃から登ってくる逆流物を吐き出すような仕草をする。

洋介の肌は寒気のためか鳥肌がたっている。心にも思っていないことを間違った相手に間違っても言うてはいけない、そう改めて彼はしみじみと思う。

「ちょっと、寒気がするからやめてくれない？」

「ふん」

由利子は両腕を押さえている。

まさかバカ真面目に洋介が言葉を返すとは予想しておらず、心の準備が全く出来ていなかったのが災いしていた。

日焼けという言葉とは無縁な白い肌に、彼女もまた鳥肌がたってしまっている。

「ああイヤだイヤだ……鳥肌が立つちゃったじゃない」

そんな彼女を無視するように洋介は大きく溜息をつく。

精神状態が冷静に戻るに連れて、全身にまとわりつく湿った蒸し暑い空気の不快な感触がはつきりとしてくる。今日は風も弱いために、澱んだ空気が教室内にとどまり不快指数はいつもよりも更に数段高い。

彼はブツブツと小言を呟く。

「ままならないなあ……」

「人を見ながら、そういう事言わないで欲しいんだけど？」

「ほんとに……なんでよりにもよって『僅か1ヶ月』とは言えお前が隣なんだよ……嫌がらせもいいレベルだろう」

「そんな文句は神様にでもいいなさいよ……ほんとに」

「はあ……」

洋介は何度目とも知れない盛大な溜息をつく。

それが由利子をますます不機嫌にさせてしまうのであるが、彼がそれに気づくわけもない。

彼女の背にどす黒いオーラが立ち上っていく様子に、周囲にたむろするクラスメート達はそれぞれの方法で距離を取り非難していく。そこかしこから『どうにかしろよ』やら『またかよ』等と囁き合う声が聴こえるが誰一人として動こうとはしない。

ここ数日でもう日常の一部となりつつあるこの光景にもすでに適応しつつあるのかも知れない。

幸か不幸か、この二人の場合は全面的な喧嘩にはならない。

ただ、何処かで適当にオチが付いて終わるのを皆が既に知っている。

「でも、ああ主よ……とか言ってる敬虔なあんたは想像できないわ」「それはどう考えても無理だろ……おうおう、ついに暑さで頭がやられたか、蛆が湧いてるのはもともとだったと記憶しているが？」

「残念なお知らせですが、思考回路は正常よ?」

由利子はそう言うのと視線を英語のノートへと戻してしまう。
クラスメートから一斉に肩の力が抜けていく。

「そうですかい」

洋介も何をするわけでもなく、ただ蒼い空へと視線を戻す。

二人のやりとりが収まったのを気配で察した、洋介の前の席に居座る一人の男……呆れ顔と迷惑顔を混ぜたような表情と共に椅子に横座りして彼へと顔を向ける。

いかにもインドア系と言う雰囲気、洋介と由利子と異なり、もともと色黒であるが軽く日焼けした褐色の肌——暑苦しいと洋介は見るのも不愉快といった表情である——の、アウトドア派のスポーツマンと言った雰囲気、纏っている。実際に、陸上部に所属しており中距離の選手で県大会までではそこに優秀な成績を収めている。

彼は高遠 圭吾と言い、洋介と由利子にとっては中学以来の知り合いである……二人ともあくまでも『知り合い』だと言い張り、意地でも『友人』であるとは認めようとしなない。二人の言葉をそのまま借りれば『こんな暑苦しい友人は要らない』である。

そう断言されてしまう可哀想な彼であるが、諦めてその立場を受け入れてしまっている。

しかし、この男もどこかで道を踏み外してしまったらしい。

「お前ら……」

二人は彼と視線を合わせようとしなない。

洋介は露骨にウザそうな表情に変わると、そのまま視線を更に遠くへと向けてしまう。

「ああ無駄な体力を使っただなあ……」

「それはこちらのセリフなんですけどね？」

圭吾は呆れ顔で辞書を高速でめくる由利子へと視線を移す。

一単語をものの三秒程度で発見することができる彼女の辞書探索能力は無駄に優れている、そう彼はいつも思う。一分間で一〇単語以上を高速で引き、同時に和訳を進め、休み時間の一〇分間で一時間分の予習をきっかりと終わらせてしまう彼女の無駄な才能。これに対する『予習ぐらい家でしてこいよ』というのは野暮なツツコミである。

その姿に呆れ、同時に感心しながら頭を抱えて彼は言う。

「人の後ろで、殺気立ったやり取りするのやめてほしいんだがね？」

二人が揃って同時に圭吾を睨みつける。

彼は虎に睨まれたネズミのように後ずさりしてしまう。

「うるさ……」

「黙ってなさいよ……このロリコン」

二人はそれぞれに容赦なくそれだけ言うと、黙ってそれぞれ作業へと戻る。

圭吾は項垂れると、小さくなって予習へと戻って行く。

「早く席替えしたいぞ……」

そう呟く彼の言葉は二人の耳に届くことはない。

洋介も由利子も既に揃って『暑苦しい』圭吾を意識の外へと追いやってしまったのである。

こんな状況であってもこの三人の仲は決して悪くはなくそれなり

に良好である、というのが不思議なことだと周囲は言う。

洋介は何を思ってたか、頭を抱えてしまっている。

「「はあ……」」

二人の溜め息が見事にハモる。

洋介は授業中も心ここにあらずといった表情で頭を抱えていた。それでもボンヤリとしていた所を教師に当てられたとしても、不思議なことに何事もなかったかのように答えられてしまうところが彼らしいところである。そして、それを見ていかにも悔しげ且つ恨めしげな表情を見せる教師の顔を見るのが好きと言うのは、悪趣味とも言うべき趣味であろう。

それを見ながら『いい加減諦めればいいのに』と由利子はいつも思っているのである。

しかし、特段問題児というわけではないが、授業態度が決して良いとは言えない洋介と由利子がそれを言うのは凡そ正しいとは言えない。

そんな彼女から見ても今日の洋介はどこかおかしいと言えばおかしかった。

病気でもないというのに苦悶の表情を浮かべていたのだから。

「で、洋介……いったい今日はどうしたんだ、いつにも増して変だぞ？」

学食から戻ってきた圭吾は後ろの席の友人へと声をかける。

圭吾を『友人』であるとは意地でも認めようとしなない彼は、未だに何をするわけでもなくボーっとただ空を見つめている。稀にある

ことだとは言っても、今日は余りにもその期間が長く少々心配になっている。

しかし、彼が視線を戻すようなことはない。

「心配するな、少なくともお前よりは変じゃない」

「ほんとにね……あんたよりも変になったら人生おしまいだわ」

圭吾は思わず、その隣席で読書に耽っていた由利子へと視線を向ける。

彼女もまた本から視線を外すような事はせず、ただ淡々と言葉を紡いでいる。

彼はガクリと肩を落とす。

「……………そんなに暑苦しいのが悪いのかよ!？」

「悪い」

洋介は唯一言で即答する。

今日は風が弱いためか、彼の機嫌も心なしが悪い。

「最悪、むしろ死んでくれない？ 暑苦しい上にロリコンとかもう最悪でしょ、人として終わってるから？ ゴキブリですらそこまでひどくはないわ……」

「ひど……ひどいんじゃないか、流石に」

由利子は表情を変えることもなく、視線を本から外そうともせず言葉を続ける。

頂垂れる圭吾を気にもすること無く、彼女はページを捲る手を止めると右手を口に当てて何かを考えこむように静かになる。

風に吹かれてページが捲れるがそれを気にも留めることはない。

「で、洋介……このバカは放っておくとして、あんたはいつたい今日はどうしたの？」

「ああ、なんか話したらいろんな意味でこいつ並に人生終わりそうだ」

洋介は顔を、それなりに凹んでいるのか力なく項垂れる圭吾の背中へと向けると。

喧嘩腰ではなく落ち着いた声音で、盛大に溜息をつきながら返す。

彼は『夢』をはつきりとは行かないまでも、臍氣にその内容を思い出してしまっていた。

よりにもよって彼の『妹』と肌を重ね、唇を合わせると言う言葉に出してしまえば社会的に抹殺されかねない夢の記憶。彼自身はそこまで欲求不満になっていたとは思っていなかったし、そもそも妹をそう言った対象としてみたことはなかったと言い切ることができた。

そして『まだ由利子の方がましだったか……』などと一瞬考えて、『それはない』と全身を駆け巡る寒気を振り払う。

しかし、妹というのは彼にとってみればもつと有りえないことであつた。

少なくとも妹属性はないと断言できるからである。

——嫌な気分だなあ……

ただ夢の最後に見たその白い素肌ははつきりと印象に残っている。そして何よりも、不気味なほどに血のように『紅い』瞳も……

「それは最悪な話ね……察しておくわ」
「物分りがよくて助かる」

そして由利子はそれだけ言っと、風で捲れたページを元に戻すと再び本の世界へと戻って行く。

洋介はな今日一日で何度目をも知れない溜息をつく。

「ないわ……」

その呟きは教室の喧騒に溶けこんで誰にも届くことはなかった。

Scene 04・ささやかな一刻

昇降口には多くの生徒達が低い空を見上げている。

天気は悪いというのに気温は大して下がっておらず、蒸し暑さ故に不快指数は逆に高い。

「……イヤです、本当に」

シトシトと言う言葉の似合う雨が降っている。

五限目の授業中に急速に悪化した空模様は、そのまま好転する気配はない。

少女は今日何度目とも知れない溜息をつくと、そう呟きながら分厚い雲に覆われた一面の灰色の空を見上げる。朝の天気予報によれば晴れ後曇り、夜からは雨が降ると言う事であったが、油断した彼女は傘などという文明の利器を持ってきては居ない。それに加えて置き傘もなければ折りたたみ傘すらも鞆に入っていないという運の悪さ。

その運の悪さを心底恨めしく思い、呪っていた。

彼女は雨は好きではない。

特にこう言った気分の日、多くの人々がそうであるように気を沈ませてしまう。

「どうでしょうか……ねえ……はあ」

友人の茉奈はと言うと部活があると言ってこの場には居ない。

もつとも、その彼女もまた傘を持っていなかったようで雨宿りを兼ねての部活動であるということを語っていた。

そんな事は雅には興味はなかった。

今の彼女の関心ことは何よりも自宅の冷蔵庫の中身であり、そし

てその次に兄のことである。

冷蔵庫がすっからかんということは流石にないが、それでも今晚の献立を考えるには少々めんどくさい程度に中身が減っているのを思い出す。肉や魚介類といったメインディッシュに向いた食材が存在してないのである。

だからこそ買い物を考えていたのであるが、生憎この雨模様と言うのが彼女を更に悩ませる。

「みやちゃん、傘持ってたないの？」

「……え？」

後背から比較的聴き慣れた声が聞こえてくる。

彼女も良くも悪くも様々な意味で、よく知っている人物である。そう、兄と付き合いの長い女性であり、仲が良いのか悪いのか謎な由利子その人のことなく少年のような印象を受ける声。

そして近くに問題の兄の気配も感じて彼女は振り返る。

兄と並んでもそれほど差がない、一六〇台後半という女性としては長身で細身な彼女の姿。

「みやにしては珍しいな……」

「兄さんに……由利子さん、珍しい組み合わせですね」

雅はうんざりとした表情の兄と、小さく舌を出している由利子の顔をそれぞれ順に見つめる。

「珍しいかなあ……割と普通の組み合わせだと思っけどね……？」
「なるほど……」

そして昇降口を出た二人の姿を見て、彼女は事態をおよそ把握する事に成功し、兄の表情の意味もはつきりと理解することができた。

置き傘と思われる二四本もの骨を有する飾り気のない上等な黒い傘を持つ兄と、手ぶらな由利子の姿……便乗されるのを嫌がっている、それだけの事である。

そしてこの状態で彼女はどう行動すべきかと思考を巡らせる。

いくら七〇センチを超える長さがあるとは言っても三人が入るには物理的に厳しい。

誰か一人を追い出すのはさすがに気が引ける。

「そういうことだ」

しかし彼女には兄が次に発する言葉を正しく理解していた。

雅にとつては由利子もまた付き合いの長い『先輩』であり、かれこれ八年ほどになるが事あるごとに不思議と衝突する二人の関係をよく理解している。そして二人が喩み合いながらもそれなりに上手くやっているのは、この二人がかなり『似たもの同士』であるからだろうと漠然と理解している。

知らない人が『遠く』から見れば仲睦まじく見えるほどにつるんでいることが多い。

そして近づくとそのどす黒いオーラにどん引きするのである。

「よし、由利子……言わなくてもわかるよな？」

「洋介さ、こういう時って普通は女の子二人で入らせるものじゃないかな？」

「女の子……誰が？」

洋介は一瞬の躊躇いも間もおかず、本当に心底不思議そうな真顔で言い切ってみせる。

わかっていたとしても彼女は開いた口が塞がらない。

「……………兄さん」

「お前と妹を比べてどちらが重要かなど、説明する必要すらないほど自明じゃないかね？」

「か弱い私にこの雨の中を濡れて帰れなんて……酷すぎるわ。先程まではあんなにも私のことを気遣ってくださっていたと言うのに……遊びだっただけですね!？」

洋介は分厚い雲に覆われた空を見上げながら言う。

由利子は悲劇のヒロインであるかのように大仰に、そして無駄に堂々と演技らしく振る舞いながら視線を外し、項垂れて見せる。雅の耳はオヨヨ等と時代錯誤な泣き真似の合間に、ケケケと笑いながら『風邪を引いたら三日三晩呪って祟ってやる』などと言う物騒な言葉が聞こえたような気がしたが気にしないことに決める。

洋介はリアルに『（。d。y）』と言う表情をしながら、知らん振りを決め込んでしまう。

雅はそんな彼の表情を見てクスリと笑う。

場を沈黙が支配している。

その場に佇む誰もがそのどす黒いオーラのぶつかり合いに息を飲む。

ザーという雨が校庭を、コンクリートを叩く音だけが響いている。

「心配するな、バカは風邪を引かないっていうだろ」

「誰がバカですって？」

「反応するのはそこかよ……」

隣にたった洋介は、声を荒げる由利子を華麗にスルーして洋介はその大きな傘を天に向けて掲げる。骨が多いためか、その色以上により無骨な印象を受ける大きな傘が雅をすっぽりと覆うようにして開かれる。

雨の錆びた鉄のような臭いに混じって兄のそれを間近に感じ取る。

鼓動が少しづつ早くなっていく。
それを悟られまいと彼女は心のなかで黒猫様を必死に強く掴み、
平静を装う。

「じゃあ、みや……帰るかね？」

「あ、はい……………」

それを聞いて由利子は仕方ないなと呟く。

間髪入れずに傘立ての中から、コンビ二で販売しているビニール
傘を一本ひったくるように勢い良く引き抜き、そしてウンウンと満
足そうに頷く。

雅も思わずガクリと肩を落とす。

「別に三ヶ月も放置してあるんだから問題ないでしょ？」

由利子はそう涼しい表情で得意げに言い切ってみせた。

二人は小雨と言うには程遠い雨の中を肩を寄せ合い、歩調を合わ
せて歩く。

ほんの数十分前までいた由利子は既にこの場には居ない。

学校の授業は大して真面目に受けていないというのに、バカ真面
目に予備校に通い旧帝大を狙う由利子とは街の駅で別れて……今は
ただ二人だけである。

女性徒としては珍しく、彼女は平気で授業中に惰眠を貪る人種で
ある彼女。

そのチグハグさが彼女らしいと洋介は語る。

「雨……止みませんね」

雅はその台詞がこの場に相応しくないと知っていても敢えてそれを口に出していた。

いつもならば気にならない沈黙が今の彼女には重たい。

「そうだなあ……買い物どうしようかね？」

「どうしましょうか……」

こうして二人で並んで下校すると言うのは何年ぶりかと思い出そうとするが、余りに遙か昔の事でしかなく思い出すことは叶わない。ただここ数年ではこのような機会は存在していなかったと言うことだけは確実であった。

それどころか、今は余りにも近い距離、互いの体温すらも感じ取ることが出来るほどの隙間、それはほんの小さな身体の動きですら触れ合ってしまうほど。それをむしろ居心地が良いなどと感じてしまう自分に雅は溜息をつく。

このまま無意識に身を寄せて、委ねてしまうような危機感が募る。

そこで会話が再び途切れる。

彼女の力なく垂れた視線は水溜りに広がる波紋へと向けられている。

傘に入りきらずに濡れた左肩は冷たく、右肩は暖かい。

陽が傾いて涼しくなったとは言え、それでも30度近い気温ではやはり蒸し暑く、背筋・首筋を汗が何度となく滑り落ちていく。汗と湿気で湿った制服が肌に張り付き、彼女の白い素肌と飾り気のない下着を透かしている。

何よりも湿った長い黒髪は重く、幾らかは背に張り付いているようにで気持ちが悪かった。

——会話が続かないんですが……どうしろと言うんですか。

相合傘などと言うことをしている気恥ずかしさは今の彼女の意識の中では大きくない。

些細なことで片付けてしまえるほどに彼女の悩みは深い。

この短時間ですら何度目とも知れない溜息をつく、二〇センチ近く身長差のある兄の顔を横目で盗み見る。

ふと視線が交差する。

洋介は気まずそうな表情ですぐに視線を逸らしてしまう。

「でも、兄さんもほどほどにしてくださいね?」

「へ?」

「へ……じゃなくてですね、由利子さんのことですよ……近くにいる私の胃が痛いです」

「それは無理な注文だなあ……あれはどうにもならない」

気まずい空気が場を完全に支配下においている。

彼女が時たま感じる兄である洋介の視線、それが自分に向けられているということは鋭利になった感覚系が知覚している。朝までは感じることもなかった纏わり付くような粘着性なようで、少し触れれば離れるを繰り返すようなじらされているように感じられる視線。それが彼女の意識を高ぶらせてしまう。

自分だけが意識していると思っていたが故の、嬉しい誤算。

「わかっていますよ……」

短時間の間で何度目ともわからない小さな溜息が漏れる。

これもまた何度目ともわからない胸元から首にチクチクと突き刺さるような兄の視線。

雅はそれに応えるように、反応を確かめるように纏わり付いた髪を右手で掬うように持ち上げると、それまで隠れていた耳元から頂

までに至る少々病的とも言えなくもない白い素肌が顕になる。

そのままどうしたんですか？とでも言いたげな表情で小さく首をかしげて見せる。

「兄さん……？」

そのまま指を離すと黒髪はさらりと落ちる。

時折触れる汗の滲んだ皮膚を通して鼓動の高鳴りが伝わってくるように感じていた。

肩にポツリとまた水滴が差す。

「ん？」

「どうかしましたか……？」

洋介はバツが悪そうに右手で頭を掻く。

そんな彼の様子が可笑しく、雅は視線をそのままにクスリと微笑む。

「なんでもないよ」

「何か付いていたりするなら言ってくださいね」

「ほんとになんでもない」

洋介は首を何度か横に振る。

彼女はそれが下策であったと言ってから気づくが既に遅い。

短い会話の後に再び訪れる沈黙……しかしそれも、数刻前まで程は不愉快ではない。何度となく、まるで挑発するかのように彼女はささやかで、あくまでもそれとなくアピールを繰り返す。その度にバツの悪そうな表情をし、時折溜息をつく兄の姿を微笑ましく、口元に小悪魔的な微笑を湛えながら眺めている。

歩きざまにちょこんと背伸びをすると兄の首筋へ息を吹きかける。

洋介の身体がピクリと震える。

「なにやってるんだか」

「悪戯ですよ？」

彼女は小さくステップを踏むと、路肩に転がる小さな石ころを蹴る。

跳ねて水溜りに堕ちたそれは波紋を立てて止まる。

Scene 05・日常と非日常

普段の彼ならば有りえないようなミスが続いていた。

装備の交換忘れ、ターゲットの選択ミス、キーの押し間違い……その下にある無数とも言えるような細かな誤りが彼の気分をより一層泥沼へと引きこもつとする。こういう時に『そんな時もある』やら『たまにはある』やらと揃って声をかけて貰えるがそれが逆に心苦しく感じられてしまうほどに重症であった。

何度目ともわからない溜め息と呻き声が漏れる。

それこそ心が挫けてしまいそうなほどに。

雑念を振り払おうといつものようにネットゲに興じていたものの、気分転換と言うには程遠い。

幸いなことに死者が出るような激しい狩場ではなく、適当にやっけていてもそれほど問題にならないのが救いといえば救いである。それでもどちらかと言えば神経質で完璧を求めがちな彼にはそれが我慢ならない。

マウスを握る右手に自然と力が籠る。

「ああ……またやった、はあ」

バフ——ネットゲにおける強化スキル——の一つの掛け忘れと言う明快なミスに気づく。

気づいているのかいないのか誰一人としてパーティメンバはそれを指摘してこない……どちらかと言えばそれほど効果の大きくないバフであるからなくても問題はないのである。

かれこれダンジョン内に籠り始めて一時間余り、そろそろ撤収かとタスクバー右の時計をみる。

予想していた時間とのずれは一分程度でしか無い。

「うーん……はあ」

様々な嫌悪感が消えることなく胸の中を渦巻く。
考えれば考えるほど深みに嵌り、かと言って考えないという選択
肢は彼には存在していない。

「ままならないなあ……」

その呟きは誰にも聞かれることはない。

電気代の節約も兼ねて基本的には可能なかぎりリビングで過ごす
ようにはしているが、親の存在が希薄なこの家では所謂ゴールデン
タイムを少し過ぎただけの時間であっても人の気配がないというの
は珍しいことではない。

それを寂しいとも思わなくなっただのはいつの頃のことからかも彼
は思い出せない。

ネット環境の存在というのは大きいのかも知れないと、彼は思う。
一枚板のリビングテーブルの上に一七インチの液晶画面のノート
PCを置き、深いソファに腰掛けてネットゲに興じるというのも彼に
とっては日常の光景である。彼が一人にいる時には、テレビは付け
ない主義であり、またヘッドフォンを使用していることから音らし
い音はしない。

時計の秒針が時を刻む音もなく、クーラーの風の音がもつとも大
きいほどである。

「よし……終わりと」

そう呟くと背筋を伸ばす。

支援職というのは人によっては肩が凝るようで、適度なストレッ
チは欠かせない。

グラスに手を伸ばすと生温くなった麦茶を喉へと流し込む。

「ぬるい……はあ」

キッチンへと入り、冷蔵庫を開ける。

冷気が長く集中して温まっていた身体に突き刺すような冷たさが染みる。

結局のところ、雨の中重たい荷物を持ち歩くことを嫌って最小限の買い物しかしなかった事もあり、冷蔵庫の中身は寂しいままである。滅多に帰って来ないというのに缶ビールを始めとした大量のアルコール類がその一角を占拠している様子がなんとも彼には腹立たしい。しかし、確認するとたまに銘柄が入れ替わっているところを見ると消費はしているようであるので文句を言うにも言えない。久しぶりに明日も天気がぐずくと言う予報が気を重くする。まとまった買出しが出来るのは数日は先になりそうである。

リビングの扉の開く音。

雅はキッチンで冷蔵庫と睨み合いを続ける洋介の姿を認める。

「兄さん、私にもくださいな…… あ、出来れば氷入りで」
「了解」

彼女はまだ乾ききっていない長い黒髪をタオルで拭き取りながら、スタスタと言うスリッパの音と共にキッチンへと近づく。

途中で立ち止まり、テーブルの上に無造作に置かれていたテレビのリモコンを手にとると電源を入れる。目まぐるしくチャンネルが切り替わり、何もやってませんと呟きながら国営放送のニュース番組に落ち着いてしまうところは女子高生らしくない。

洋介は彼女の姿を横目に見ると、いつものように呆れながら頭を抱えてしまう。

「あのなあ……だから、パジャマくらい着てから出てこいと……」

お約束のようにバスタオル一枚を羽織っただけという姿の彼女。全体的に細い身体、ギリギリの長さの短い裾からはスラリと伸びた白い足が伸び、上に視線を移せばそれなりに膨らんだ胸の谷間が覗いている。濡れた黒髪が肌に張り付き、妙な艶めかしさを感じさせる。

普段の病的なほどに白い肌はほんのりと熱を帯びて赤みがかったいるのがわかる。

「別にいいじゃないですか、見られて困るような人も居ませんし？」
「一般常識的な話をしてるだけなんだけどね？」

「どこでも『家族』なんてこんなモノだと思いますよ……むしろそんな家でまで几帳面な妹とか姉のほうが余程レアな気がします」

「まあ……はあ」

横に並んだ彼女は結露し水滴にまみれたグラスを両手で包むように持つ。

視線のやり場に困るといふほどの光景でもなければ、そもそも見慣れた姿であるが……それでも夢に見た彼女の姿と被り、洋介の視線はあちらこちらへと彷徨ってしまう。ほんの少し視線を下げれば細い肩と、そしてバスタオルに包まれた胸元がはつきりと視界に飛び込んでくる。

肌に張り付いた黒髪と、大きな黒い瞳に柔らかな頬、そして色の濃い唇。

彼女の顔は近い。

洋介はバツが悪そうに頭を掻いてごまかす。

「何も着ずにふらつかれるよりはマシでしょう？」

「それはなにか基準が間違ってるだろ……人間的にどうよ」

「そうでしょうか」

その言葉が洋介の意識に突き刺さる。

夢の中で最後に見た、オレンジ色の淡い光に照らされた彼女によく似た……瞳の色以外は全く同一の少女の裸体の映像が蘇ってくる。思い出さないように頑丈に蓋をしていたつもりであったが、それは全く意味をなしていない。

夢と言うには余りにも生々しく現実感のある映像。

逆にその生々しさが彼から現実感を奪っているとも言えた。

「いいけどさ……………まあ」

この短時間だけで片手で数えられる回数を裕に超えた溜め息は確実にカウントを増していく。

彼女は、口元に笑を浮かべながらまっすぐに洋介の目を見つめている。

「溜め息、多いですよ？」

「気のせいだよ」

冷えた麦茶を飲み干し、ふうと満足気に息を吐くとグラスをカウンターへ置く。

捲れ気味になって付け根の辺りまで丸見えになっていた裾へと手を伸ばすと、ちゃんと摘んで見せつけるように乱れを直す。

そんな小さな仕草が洋介の視線を引きつける。

「誰かさんが、妹に欲情するような変態さんならさすがに考え直しますよ？」

彼はあのなあと呆れ顔で呟きながら首を横に振る。

クスクスと笑う妹の姿に最早、苦笑いするしかできることは無い…… 何かが違うと小さな違和感を感じながらも、この程度のやりとりもよくある事だと思い直す。こうしていつも適当にはぐらかされて終わり改善される気配は一向にない。

「ないな……」

「それなら問題ないじゃないですか」

「はぁ……」

取り付く暇もなくそう言い切られ、洋介は頂垂れながら盛大な溜息を付く。

「ご馳走様です」

彼女はそれだけ言うのとふわりと身を翻す。

パタパタと音を立てながら扉の向こうへと消えていく。

洋介は妹の去っていったドアを見つめながら呆然と立ち尽くし、思索に耽るような真剣な表情で頭をポリポリと掻くしかできない。彼は自分が授業もそっちのけで真剣に考えこみ、悩むのが妹のいつものいい加減でアホな姿を見てアホらしく思えてくるのである。

実際のところ『見た目だけならば』彼の好みにおよそ一致しているのだから似たような女が夢に出てきても可笑しくはないだろうと都合の良い解釈を加える。

「ほんとにままならないなあ……」

溶けて小さくなった氷を一口の中へ放り込んだ。

雅は自室のドアを閉めると内側から鍵を掛ける。

冷房の効いていない締め切られていた部屋はサウナのように蒸し暑く、汗を流してさっぱりとしたばかりの身体からまた汗が吹き出してくるのを感じていた。そのままドアにもたれかかると肩で息をしている。肩が木製のドアに触れ、ヒンヤリとした感触が伝わってくる。

彼女は冷房を入れる気すら起きない。

「はあ……はあ……ふう」

息遣いは荒く、肩を上下させている。

ものの三十秒ほどで額に浮かんだ汗は珠となって重力に惹かれるように滴る。

そして髪に巻いたタオルを解き、その中に窮屈につめ込まれていた長い髪を解き放つとまだ湿っている重たい髪は音を立てて広がって落ちる。汗が滲んだ肌に髪が張り付いた感触が不快でたまらなかった。

更に続けるようにバスタオルをも乱暴に引き剥がすと、その勢いのままで一糸纏わぬ裸体をうつ伏せにベッドへ投げ出す。

身体は沈み込むが、すぐにスプリングの反発によって押し戻される。

生暖かいシーツの感触、すぐに汗を吸って濃い色に染まっていく。

——何やってるの……私。

彼女は息もできないかと思うほどにマットレスに顔を押し付ける。剥き出しの背中から汗が吹き出し、珠となって流れ、全身を風呂上りのように濡らす。

力任せに頭の上にあった枕を掴むと顔とシーツの間に引きずり込み、羽毛製の柔らかな感触に耳まで真っ赤に染まった顔を埋める。

そのままの状態でも何度も顔を左右に振る。

「うう……最悪、最低、何が変態よ……もう」

呻き声を上げながら足をばたつかせるが気が収まる気配はない。
今日一日の自身の行動に対する強烈な自己嫌悪に襲われながら、
一人という状況に奇妙な冷静さを得たことが彼女を逆に混乱へと導いていく。

「認めない、認めない……認めないったら認めない、認められる訳ないじゃないっ……のよ」

一頻り叫ぶと、今の声が外に漏れていないかと心配になる。

埋めていた顔を上げると、右手の人差指を皮膚が傷つき剥がれてしまうのではないかと思えるほど強く噛む。その痛みが彼女を一時的なものに過ぎなくとも、より精神状態を冷静な方向へ導くことに成功させる。

しかしそれも長くは続かない。

自然と噛む力は弱くなり、そつと唇に触れられる程に変わっていく。

「認めない……絶対に認めない、ありえないからあ………」

その声は語尾に向かうに従って次第に弱まってしまふ。

指先が自然と甘噛みするように啜えられ、次第に舌がその先端を舐めとるように蠢動を始めると、その白い指は唾液にまみれていく。
動きはより激しく、より濃密な物へと時間をかけて変化する。

口内のより深くへと侵入し、その全体を丹念に絡めとるようにして蠢く。

それすらも物足りない、彼女はそう感じた。

「……ん、う……んう」

唾液が一筋、掌へ向けて唾液が滴り落ち流れていく。

彼女はどれほどの時間そうしていたか理解しておらず、それを判断する術も持たない。しかしこれ以上はいけない、とそう感じた心が身体の動きを無理矢理に止める。

愛おしげに指が離れると、力尽きたように全身から力が抜けて顔は枕へと沈む。

——なにしてるんだろ……私。

汗でべつとりと濡れた肌も、髪も、纏わり付くような蒸し暑い空気も全てが不快であった。

しかし、ここで冷房を入れては身体が冷えてしまうと、そう頭は冷静に判断しクーラーを入れることを思いとどまらせる。このまま冷やせば風邪を引いてもまるで可笑しくはない。

披露のためか急に襲ってくる眠気に抗えず、そつと瞼を閉じる。

そのまま微睡みの中へと意識は堕ちていく。

それに言い知れない恐怖を感じ、必死に抗おうと唇を動かす。

「ダメ……」

弱々しく呟くが身体はまるで支配権を失ったように言うことを聞かない。

意識の内側から囁くような、そして甘く、甘美な響きの人の声が聞こえたような気がした。

しかし何を言っているのかまでは聞こえない。

雅の意識はそこで途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3631u/>

妖精な妹は夜だけ魔王【2chなろうスレ企画】

2011年7月18日15時30分発行